慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キューバに関する記述の系譜 : フンボルトと奴隷制との関係において
Sub Title	Una genealogía de la esclavitud en Cuba : En torno a A. Humboldt y sus secuaces
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.33 (2018.) ,p.239- 262
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20180630-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キューバに関する記述の系譜

――フンボルトと奴隷制との関係において――

前　田　伸　人

序章　はじめに

1　問題の所在

本稿は，キューバ島に関する地誌記述の流れを考究する一環として，19世紀の喫緊の問題の一つであった，奴隷制を巡る時代背景を素描することが目的である。併せて，同世紀に書かれた旅行記などのいくつかを取り上げて，時代背景と関連づけて簡単な紹介も行うつもりである。

さて，18世紀後半からカリブ海島嶼に関する旅行記や地誌記述が増加してきた。行動した順に従って記述した旅行記のタイプが多いが，時間を固定した地誌の記述もある。後者の場合，ドイツの地理学者で探検者であるアレクサンダー・フォン・フンボルトを引用するまでもなく，先住民文化の香りが馥郁たる地域に記述の関心が向けられていることが多い。メキシコ然り，ペルー然りである。

それに比べると，カリブ海島嶼の場合，サトウキビやコーヒー，タバコなどを栽培するプランテーション経済体制に再編成され，黒人奴隷が多数労働しているという点で，先住民文化・文明との連続性が切断されていることに特徴がある。そのため，地誌記述も勢い奴隷制の現状やその是非について論ずることが記述の中心になることが多いと言える。

2　先行研究や旅行記の紹介

アメリカ大陸部と違い，カリブ海島嶼地域はスペインだけでなく，フランス，イギリス，さらにはオランダ，スウェーデン，デンマーク等のヨーロッパ勢力が領有していたから，各国語を用いた行政報告や旅行記の類いが刊行されている。

フランスの場合，トゥサン・ルーヴェルテュールの反乱で終熄させられるまで，サン・ドマング島つまり現在のハイチ島がサトウキビプランテーションの中心地であった。この地の地誌を描いたのがモロー・ドゥ・サン・メリーであった(1)。この人物はまた，カナリア諸島の地誌をも著した人物としても知られる。

英国はバルバドス島やバハマ諸島さらにはジャマイカ島を領有していたから，奴隷の反乱に悩まされていた。自国領はもちろん，スペイン領の奴隷制にも関心を怠ることはなかった。その中で，デイヴィッド・ターンブルやリチャード・マッデンによる旅行記，さらには複数の議会人の発言などは注目に値する。

スペインは，キューバ島とプエルト・リコ島，ヒスパニオラ島の東半分を領有していた。19世紀初頭に南北アメリカ大陸部の地域が分離独立したのに対し，カリブ島嶼地域はスペイン領に残留した。とはいえ，とりわけキューバがサトウキビ経済の中心であったし，奴隷が人口の多くを占め，騒乱も絶えなかったところから，本国の関心も深かった。ドイツ人探検者アレクサンダー・フォン・フンボルトが本来の『新大陸赤道地方紀行』の一部を抜粋して再構成した『キューバ島に関する政治的試論』(2)が登場し，スペイン語に翻訳されたりした。さらにはスペイン人の社会主義者ラモン・サグラの手になる『キューバに関する地勢，政治ならびに自然史』が

(1) Méric=Louis=Élie Moreau de Saint-Méry, *Description topographique, physique, civile, politique et historique de la partie francaise de l'île Saint-Domingue* (1797) (Paris: Société française d'histoire d'outremer, 2004).

(2) Alexander Humboldt, *Essai politique sur l'île de Cuba*, 2vols (Paris: Gide Fils, 1826).

あるし，サトウキビ農園に関する図像が多く盛り込まれたエドゥアルド・ラプランテの著作も看過できないだろう。

1930年前後，フランスでは古典的地理学派（ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ学派）の手になる『世界地誌』が出版され，マキシミリアン・ソール編集『世界地誌第14巻：メキシコ・中米編』[3]の中にキューバ地誌が収録されている。これには，フェルナンド・オルティスが協力しているのが興味を引く。オルティスはアフリカ系キューバ人文化を研究し，“トランス・カルチュレーション”の概念を提唱したことで知られる人物である。本来は，黒人系の犯罪率の多さから，イタリアのチェーザレ・ロンブローゾに依拠して，犯罪と身体的特徴との相関関係の解明に関心を注いだこともあった。また，同時に地理学者でもあったから，先述した地誌執筆に協力したのである。

奴隷貿易に関する著作は数多く存在するが，中でもハーバート・クラインによる『大西洋奴隷貿易』[4]が全体像を知るのに便利である。アメリカ大陸とアフリカ大陸との歴史的・社会的状況を考察し，中間航路の実態を明らかにし，奴隷制廃止への道程を描いている。

奴隷制に関する著作も数多くあるが，カリブ全般なら，サトウキビに注目した『甘さと権力』[5]を書いたシドニー・ミンツが知られる。キューバの奴隷制に関しては，フランクリン・ナイトの『19世紀における奴隷貿易』[6]が代表的である。さらに，サトウキビ産業の発達と奴隷制を考察したものにフラヒナル[7]の著作がある。奴隷制に反対する英国知識人の思想が純粋に人道的理由からだけでなく経済的動機が潜在していたのを解明し

---

(3)　Max Sorre (ed.), *Géographie universelle*, vol. 14 (Paris: A.Colin, 1928).

(4)　Herbert Klein, *The atlantic slave trade* (Cambridge Univ. Pr., 2010).

(5)　Sydney Mintz, *Sweetness and power* (Penguin, 1986).

(6)　Franklin Knight, *Slave society in Cuba during the nineteenth century* (Univ. of Wisconsin Pr., 1970).

(7)　マヌエル・モレノ・フラヒナル，『砂糖大国キューバの形成』（エルコ，1994）.

たのが，トリニダード・トバゴの政治家であったエリック・ウィリアムズで，『帝国主義と知識人』[8]を著している。キューバの奴隷制を巡る，英西両国の外交的緊張を描いた作品に，ジャン・ピエール・タルデューによる『死か支配か：キューバの奴隷制の法規を巡って』[9]がある。とりわけ，本稿の記述にはこの書に負うところが大きい。

3　章の構成

先ず第一章では，奴隷貿易廃止の是非を巡って英西間に展開された外交上の相克を描く。続いて第二章では，キューバ記述の定型スタイルを確立したドイツ人地理学者フンボルトの書いたキューバ論に関する問題を略述する。また，第三章では，19世紀のキューバ問題と格闘した経験のある人物とその著作について記述を行う。そこでは，キューバ人エリート，スペイン人社会主義者，反奴隷制論者のイギリス人を扱う。最初のキューバ人は啓蒙主義者のフランシスコ・アランゴ・イ・パレーニョ，アメリカ併合主義者からそれを捨てたアントニオ・サコを扱う。スペイン人社会主義者はラモン・サグラを扱う。英国人はターンブルと並ぶ反奴隷制論者のリチャード・マッデンを俎上に載せる。最後にフンボルトで扱ったフェルナンド・オルティスに今一度注目しておく。

第一章　キューバ島をめぐる外交関係

1　ハイチの奴隷反乱と奴隷解放運動の進展

18世紀末，フランス革命に触発されてサン・ドマング島の黒人奴隷がサトウキビ農園主に対して反乱し，ついに独立を達成するに至った。その過程で，それまで最大の生産量を誇っていた同島のサトウキビ生産が激減し，キューバ島が急激にサトウキビ生産を増やしていった。それとともに，生

(8)　Eric Williams, *British historians and the West Indies* (African Pub. Co., 1972).

(9)　Jean Pierre Tardieu, *Morir o dominar* (Vervuert, 2003).

産に従事する労働力として，黒人奴隷の需要も同様に急激に増加することになった。

その中にあって，奴隷貿易廃止運動，次いで奴隷制そのものを廃止する運動が生じてきた。廃止運動は，一方で人道的な理由から生じたのもあるし，他方で経済的な理由に由来するものもあった。人道的な面から運動を率いた人物には，反奴隷制協会を創設したトマス・クラークソンがいるし，英国艦船による奴隷貿易廃止の建議を議決させるのにこぎ着けた（1807）議員，ウィリアム・ウィルバーフォースもいた[10]。

それに対して，経済的観点ないし勢力均衡の観点から奴隷貿易廃止を謳った場合もある。その論理は，サン・ドマングすなわちハイチがサトウキビ生産から離脱すると，キューバ島がカリブ海地域で一頭地を抜く生産を行うことになろう。それは換言すれば，スペインの勢力が強大になることを意味する，というものである。従って，この事態を嫌悪する英国は反スペインを目指して反奴隷貿易に走ることになる。もちろん，英国にとっては逃亡奴隷との戦争に苦しんだジャマイカ島での痛い経験があったから[11]，奴隷労働と奴隷貿易は引き合わないものと感じていたことも廃止運動を推進する力となったとも言えよう。

ナポレオンが欧州を席巻している中，英国においては，ウィルバーフォース議員の奮闘努力が実り，1807年から強力な反奴隷貿易キャンペーンを張るに至った。しかも，ウィーン会議（1815），アーヘン条約（1818），ヴェローナ条約（1822）と言った外交の場でも廃止運動を継続して主張したのである[12]。

2　西英間の奴隷貿易廃止をめぐる相克

ここでイギリスとスペインの関係に注目してみよう。ナポレオン退場後，

---

(10)　*Ibid.*, p. 23.
(11)　*Ibid.*, pp. 23–24.
(12)　*Ibid.*, p. 23.

イギリスがスペインと締結した二回の条約が重要である。

先ず取り上げるべきは，1817年両国で結ばれた条約である。スペインはフェルナンド七世が統治している時期に当たり，９月23日英国カッスルレー卿と締結した。その合意事項は，奴隷貿易を段階的に廃止し，1820年５月30日に完全廃止を目指す，という枠組みだった[13]。また，英国政府は損害を受けるスペイン人に対し補償金40万リブラを払うことを約束し，英西両国は互いに船舶を登録する権利を認める内容も含まれていた[14]。

さらに，条約の実効性を高めるための重要な事項が含まれていた。すなわち，混合委員会を二カ所に設置することも合意が行われ，その設置場所は，一つがギニア湾沿岸にあるシエラ・レオネであり，今ひとつがキューバのハバナである。前者はまもなく廃止されるが，後者は維持された[15]。そのため，違反行為がハバナを舞台に観察・報告されたわけである。

もう一つの重要な条約が，1835年６月28日に両国間で締結された条約であった。これには両国の事情が後押ししている。英国側の事情は，英国全体で奴隷制を段階的に廃止し，40年には完全廃止することを33年にまとめ，同年８月29日には奴隷解放用の予算も議決されたことがあった[16]。こうしたことの背後には，1831年から1832年にかけてジャマイカで一万人規模の奴隷反乱が生じたこと，さらにはアメリカ合衆国への併合を望んだ農園主の思惑を奴隷たちが恐れていたことがあったからだとされる[17]。

他方，スペイン側は，皇位継承を巡って女王支持派とカルロス支持派が抗争する内戦つまりカルリスタ戦争に苦しめられていたので，奴隷貿易廃止で譲歩することで英国からの支持を引き出す必要があったからだ[18]。しかし，この条約が締結されたからといって，期待した効果はなかったよう

---

(13) *Ibid.*, p. 28.
(14) *Loc.cit.*
(15) *Ibid.*, pp. 28-29.
(16) *Ibid.*, p. 29.
(17) *Ibid.*, pp. 29-30.
(18) *Ibid.*, p. 30.

だ。せいぜい，イギリスあるいはスペインの巡洋艦が，イギリス，スペイン，ブラジルの国旗を掲げた船舶の通行を遮断することが認められたに過ぎなかったらしい[19]。

非合法な奴隷貿易が横行していたから，教皇庁の回勅をも利用してイギリスは圧力をかけ続けたのである。実際，1840年４月24日，ハバナ駐在領事ジョルメーは，パーマーストーンの名でキューバ当局に要請した。ディアリオ・デ・ラ・アバナ紙に，奴隷貿易を非難するグレゴリウス16世の教皇勅書を掲載せよ，というものであった[20]。もちろん，キューバ総督はこれに反論した。

同年12月17日，スペインはエスパルテロ摂政の下，奴隷貿易を阻止すべく，英西間でより強力な施策を行う事項の素案が示された。つまり，奴隷の密輸を阻止するために，従来設置されていた混合委員会を混合裁判所に格上げして監視を強め，1820年10月30日以降輸入された奴隷を解放しようと企図されたのである[21]。

こうした英国からの提案に対し，スペインは当然異議を唱えた。第一の理由は，スペインの名誉を失墜させる提案だからであった。さらに，スペイン領においては，奴隷は人間的な扱いを受けており，その証拠に黒人人口は増加していることがある，その上，奴隷たちをサトウキビ生産から切り離せば，キューバが第二のハイチないしジャマイカになりかねないだろうし，何よりもイギリスはアメリカ合衆国の奴隷制にこそ容喙すべきではないか，といった理由を列挙している[22]。

３　“好ましからざる人物”デイヴィッド・ターンブル

こうした中でキューバ島には有り難くない人物が入ってきた。パーマー

---

⑲ *Ibid.*, pp. 30-31.
⑳ *Ibid.*, p. 31.
㉑ *Loc.cit.*
㉒ *Ibid.*, pp. 31-32.

ストーン卿はハバナ駐在領事として，1840年11月３日にデイヴィッド・ターンブルを送り込んできた。この人物は，カナリア諸島出身の研究者マリオ・サンチェス・バルバによっても考究されている人物である[23]。

ターンブルは，タイムズ紙の記者として，1830年の７月革命時にはパリに駐在しており，1835年にはスペインに滞在して，仏・西の情勢に知悉した人物であった。その後旅行に赴き，旅行記である『西インド諸島旅行記：キューバ並びにプエルト・リコ情報と奴隷貿易』を1840年に刊行した[24]。

英国代表であるターンブルは，到着するや否や，新しい提案を行ない，黒人奴隷から情報を得て，密輸の存在を告発しようとする。

ターンブルは，奴隷を解放すべく奴隷自身に接触を図ろうとして，1841年11月12日には，マタンサスでハバナ当局に逮捕された。スペインは英国にこの人物の解任を要求した。これに対し，アバディーン卿はスペインを焦らした挙げ句，彼を領事としては辞任させたが，代わりに解放奴隷監督官に任命したのだった[25]。事実上，ターンブルを留任させたに等しかったわけである。

この英国の姿勢に対し，農園主を中心とするキューバの寡頭層の中には，アメリカ合衆国の奴隷制支持者と接触を図る動きも出てきた。キューバが英国に乗っ取られるくらいなら，奴隷州のアメリカ合衆国に併合された方がましだという考えからであろう。キューバ総督ヘロニモ・バルデスは，英国の提案に屈すれば，今度は関心を持つアメリカ合衆国がキューバ島を狙ってくるだろうと判断したのだ[26]。

ターンブルは懲りもしないでバハマのニュー・プロヴィデンス島経由でキューバに再度やって来た。ヒバラ島へ非合法に奴隷が運輸されていない

---

(23) Mario Sanchez Barba, “David Turnbull,” *Anuario de Estudios Americanos*, XIV, (1957), pp. 241-299.

(24) Jean Pierre Tardieu, *op.cit.*, p. 34.

(25) *Ibid.*, p. 36.

(26) *Ibid.*, pp. 37-38.

かを確認する目的を持っていた。結局，キューバ官憲に捕縛され，追放処分の憂き目に遭った[27]。

彼の暗躍は更に続いたようだ。英領のジャマイカ島を拠点にして，英・葡の非合法奴隷貿易を監視する両国の混合委員会の委員に就任した。スペイン側はジャマイカに駐在していたスパイを通じてその情報を得ていた。とりわけ，『キングストン新聞』の記事を通してであった[28]。

その上，ターンブルは，キューバからの亡命者を使ってキューバ本土で反乱を計画した。それが“エスカレラ陰謀事件”である[29]。首謀者が梯子にくくりつけられたところからこのように呼ばれている事件である。

第二章　フンボルト『キューバ島試論』の書き換え

1　アレクサンダー・フォン・フンボルト

1－A　フンボルトの著作

1799年から1804年にかけて主にスペイン領アメリカで探検旅行を敢行したのは，ドイツ人地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルトとフランス人植物学者エメ・ボンプランだった。二人はパリに帰還後，その大旅行の成果を三十巻本にまとめた。これとは別の著作をも刊行している。その一つが，『ヌエバ・エスパーニャ副王領に関する政治的試論』[30]であり，『キューバ島に関する政治的試論』[31]であった。前者は，同地に駐在する副王の協力を得，統計データを駆使して副王領の現状を国庫学ないし官房学の観点からまとめ上げた成果となった。それに対し，後者は先住民文化との関わりを持つ前者と異なり，19世紀当時焦眉の急であった問題，つまり奴隷制という，人道的にも経済的にも重要な問題を内包していた問題を扱

---

(27) *Ibid.*, p. 38.

(28) *Ibid.*, pp. 38-39.

(29) *Ibid.*, p. 40.

(30) Alexander von Humboldt, *Essai politique sur le royaume de la Nouvelle Espagne* (F. Schoell, 1808).

(31) Alexander von Humboldt, *Essai politique sur l'île de Cuba* (Gide Fils, 1826).

っていた点に特色があった。

しかし，『キューバ島に関する政治的試論』はその成り立ちに注意しておく必要がある。本来は，上で述べた三十巻本のうち，『新大陸赤道地方旅行記』[32]（1814-1825）三巻本の一部をなしていた。つまり，同旅行記の第三巻二十八章第十編がキューバの記述に当てられ，そのタイトルは“キューバ島に関する政治的試論”となっていた。そこでは奴隷制に関する論考や旅行記事，天文・測地学的観測記事も収められていた。

1826年になり，上に挙げた第十編キューバに関する本文を独立させてこれに地図と付録を併せた二巻本が登場した。付録は上記の旅行記の第二十六章（“ベネズエラ諸州の政治的状況”というタイトルが付く）を採録した内容である。

1989年にフランス・エラスム社から発刊されたのは[33]，1826年版のうち，キューバに必ずしも関連のない付録を削除し，“1825年から1829年にかけてのキューバ島の統計表”に差し替えたのである。ある意味フンボルトの意志を汲んで編集し直した著作と言えよう。

1－B　スラッシャーによる翻訳

フンボルトの『キューバ島に関する政治的試論』の英訳には大きく言って三種類と，近年出版されたものとを併せて四種存在する[34]。一つは詩人のヘレン・マリア・ウィリアムズ女史の手になる翻訳で，『新大陸赤道地方旅行記』の一部を構成している。二つ目はトマシナ・ロスの翻訳である。同様に『新大陸赤道地方旅行記』の翻訳だが，そもそも縮刷版なので，キューバに当てられた部分は極めて少なくなっている。三つ目は，1856年合衆国人スラッシャーの手になるものだ。四つ目は，近年シカゴ大学出版会

---

(32) Alexander von Humboldt, *Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent* (F.Schoell, 1814-25).

(33) Alexander von Humboldt, *Essai politique sur l'île de Cuba* (Érasme, 1989).

(34) Alexander von Humboldt, *Political essay on the island of Cuba* (Univ. of Chicago Pr., 2011).

から発刊された全く新しい翻訳がある。ここでは，スラッシャーの翻訳[35]に注目しよう。

翻訳者スラッシャーは，ジョン・シドニー・スラッシャーが正式名である。上で挙げた翻訳よりは確かに読みやすいと言えようが，この英訳には内容ないし構成上問題がある。そもそも，フランス語の原文から翻訳したのではなく，ブスタマンテによるスペイン語版からの重訳である点だ。しかも，その本文の省略をすることで，奴隷制維持を正当化するような内容に変え，同時にフンボルトを恰も奴隷制擁護論者であるかのように描いている点である。20世紀になってポストコロニアリズムの研究者がフンボルトを非難したのも，シカゴ大学版が出るまで，1996年や2001年にもスラッシャー版を踏襲した英訳版が流通したからだとされる[36]。

フンボルトは，この悪辣とも思える英訳に対して，『国家情勢ならびに高踏知識に関するベルリン新聞』紙上で非難しているので，それをここで和訳してみよう。

> 1826年パリで『キューバ島の政治的試論』二巻を刊行したが，これには私の大作『新大陸赤道地方紀行』第三巻にある，キューバの農業ならびに奴隷制の現状について記した445から459頁を余すところなく収録されている。同じ頃，この著作の英訳とスペイン語訳が出版された。スペイン語訳には “Ensayo politico sobre la isla de Cuba” の表題が付され，人に情感を喚起させるとても自由な表現を聊かも省いていない。今出版されたばかりだが，とても驚愕させられるのが，英訳版である。同書は，フランス語の原本ではなく，スペイン語から翻訳しており，ニューヨークのダービー・ジャクソン社刊，オクターヴォ版で400ページある。表題は The Island of Cuba, by Alexander von Humboldt. With Notes and a preliminary Essay by J.S.Thrasher で

(35) J. Thrasher, *The island of Cuba* (Derby & Jackson, 1856).

(36) Humboldt, *op.cit.*, (2011), pp. xxii-xxiii.

ある。このスラッシャーなる翻訳者は，かの美しいキューバ島に長い間滞在したことがあり，人口・農業・諸産業に関する新しい数値データを私の書にふんだんに盛り込んでおり，奴隷制反対に異議を唱える意見に好意的な姿勢を見せている。しかし，私としては1826年の発刊当時と同じく，今日でも積極的に人々に訴えたい。私の内部に潜む道徳的な感情を発露したい義務に駆られるのである。すなわち，私の名前を冠した英訳書においては，スペイン語版にある第七章すべてが翻訳者の独断で抜け落ちていると言いたいのだ。私は，煩わしい仕事である，天文学的測地や磁場の強度といった測量や統計的なデータを収録するよりは，翻訳者が省略した箇所にこそ，渾身の力を注いできたのである。30年前に用いた言葉をもう一度ここで採録しておきたい。「私は，植民地における人間社会の組織，権利や生の喜びの不均等な分布，政治体制に関わらず，立法者の知恵や自由人の中庸のおかげで遠ざけることのできる喫緊の危険等に関する事柄を率直に検討してきた。人間の本性を苦しめ堕落させる者を間近に見てきた旅行者にとりふさわしいのは，不幸な者の怨嗟を軽減する義務を持つ人々に送り届けることである。この報告の中で，スペインの古くからの奴隷的法制が，赤道の南北に分布するアメリカ両大陸において，奴隷州の法制ほどにはどれほど非人道さや残虐さが少ないかを思い出した」。口頭であれ，書き物であるとを問わず，自由な意見表明の擁護者として，私はたとえ自分の主張に辛辣な批判が向けられてきたとしても，敢えて反論することはなかっただろう。しかし，今回は敢えて反論を下しておいた方が良いと信ずる。アメリカ合衆国の自由州各州において，スペイン語版ではその出版当初から省略されることもなかった箇所を皆が目にできることを切望したい。ベルリン，1856年７月，アレクサンダー・フォン・フンボルト記す[37]。

---

(37) *Berlinische Nachrichten von Staats-und gelehrten Sachen* (Berlin, 1856). <http://www.deutschestextarchiv.de/book/view/humboldt_cuba_1856> (20

ここには英訳者による改竄同然の行為にフンボルトが憤っている様子がよく察せられよう。

1－C　キューバ知識人オルティスによる批判

フェルナンド・オルティスは，1930年にフンボルト著『キューバ島に関する政治的試論』のスペイン語版を刊行している[38]。そこでは，ブスタマンテによるスペイン語翻訳版本文を掲載し，フンボルトの伝記，オルティス自身によるこの著作の解題，さらにはスラッシャーの英訳本の序論をスペイン語にするとともに，そのアメリカ人の悪しき意図を剔抉している。

ブスタマンテのスペイン語訳は1820年代に出版されたが，ハバナ当局から発禁禁止処分を受けている。その目次に注目してみよう。第一章：概観。第二章：広さ。紀行，海岸，行政区区分。第三章：人口構成。第四章：農業。第五章：交易。第六章：財政。第七章：グイネス渓谷，バタバノ，プエルト・デ・ラ・トリニダー等への旅行となっている[39]。

他方，スペイン語版を重訳したとされるスラッシャー版では次のような章立てになっている。第一章：概観。第二章：地質学的特徴。第三章：気候。第四章：地理。第五章：人口構成。第六章：奴隷制。第七章：人種。第八章：サトウキビ栽培。第九章：農業。第十章：交易。第十一章：内陸の交通。第十二章：財政。第十三章：トリニダーへの旅行となっている[40]。

スラッシャー版では，すでにフンボルトが指摘したように省略部分があるし，第六章の基調が変わっていることであろう。明らかな省略部分は，オリジナルの『新大陸赤道地方旅行記』第三巻の445から459頁である。その中には例えば次のような記述がある。

Feb. 2018).

(38) Alejandro Humboldt, *Ensayo político sobre la isla de Cuba* (Fundación de Fernándo Ortiz, 1998).

(39) *Ibid*., p. 7.

(40) J.S. Thrasher, *The island of Cuba by Alexander Humboldt* (Negro Univ. Pr., 1969(1856)), pp.v-xi.

奴隷制は疑いもなく，人類に襲いかかった諸悪の中で最大の悪である。奴隷が，誕生した国の家族から引き離されて黒い建物の倉庫に投げ入れられたりする理由から，あるいは奴隷がアンティル諸島の地に押し込められた黒人の群れの一員として考えられているからである[41]。

スラッシャー翻訳版の第六章“奴隷制”と言う箇所を見てみよう。冒頭は次のように記されている。

奴隷制が存在する世界の中で，キューバ島ほど奴隷解放が頻繁に実施されている所はない。というのも，スペインの法制はフランスやイギリスのそれとは全く逆で，驚くほど自由の獲得に好意的で，それに障害はないし面倒さもない。どの奴隷も新しい主人を求めたり，もしその費用を払えるのであれば自由を買い求めたりする権利が存在する[42]。

それ以外にもこう書かれている。

キューバにおける自由の身になった奴隷はそれ以外の場所より遙かに良い状況にある。文明が最も進歩していると長年自負してきた民族においてすら凌駕している。キューバでは，今日でも引き合いに出される野蛮な法律は見当たらない。解放奴隷には白人から贈与を受けられず，自由を剥奪されることもあり，万が一，逃亡奴隷に対して収容施設を提供する余裕があると確信できるときは，国の利益になるように売却されることもあるような法律がないのだ[43]。

以上の記述を見ると，意図したにせよそうでなかったにせよ，スラッシ

---

(41) Alexander von Humboldt, *Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent*, Vol. 3 (F.Schoell, 1814-25), pp. 445-459.

(42) Thrasher, *op.cit.*, pp. 211-212.

ャーの翻訳は，フンボルトがまるで奴隷制を支持しているかのように変えられてしまっているのがわかる。

オルティスがこの批判をしたのはまさしく，キューバに対するアメリカ合衆国の圧力が厳然と存在するとともに，それに反対する運動も盛んだった時代である。それゆえ，このスラッシャーの政治的行動をもかなり詳しく批判的に記述している。奴隷州の代表としてキューバを併合しようとする野心に満ちた人物として描かれる。とりわけ，ベネズエラ人の亡命軍人ナルシソ・ロペスと組んで反乱を起こそうとしたり[44]，反乱に失敗してアフリカ北岸のセウタ（現在でもスペイン領である）の監獄に幽閉されたりした点を詳細に記述している[45]。

第三章　キューバをめぐる人物と言説

1　ラモン・デ・ラ・サグラ

サグラはガリシア州ラ・コルーニャ出身の出身である政治家，社会主義者，自然史学者である。フーリエやサン・シモンを信奉する空想社会主義者であり，徒らに革命に訴えるのではなく，教育に基礎を置いて理性的な社会秩序の創設を構想している。そして社会の原動力は，工業，農業，交通システムの発展と改良にあると見なしている人物である[46]。

科学者としては，自然史や農学に関心を持っていた。様々な協会の会員であったし，科学者，たとえば，アレクサンダー・フォン・フンボルト，キューバ出身のホセ・アントニオ・サコ，植物学者ドゥ・カンドル等との交友もあった。1822年ハバナの植物学講座の地位に就き，1835年まで同地でその職に在った。1827年からは同地の王立植物園園長の職も得た[47]。

---

(43) *Ibid.*, p. 213.

(44) Fernando Ortiz, “El traductor de Humboldt en la historia de Cuba,” in Alejandro Humboldt, *op.cit.* (1998).

(45) *Ibid.*, p. 295.

(46) Diccionario biográfico español, T. 45 (Real Academia, 2013), p. 46.

(47) *Loc.cit.*

1829年には農学研究所を創設した。彼は，記述に徹した自然史にとどまらず，キューバの発展と近代化がとりわけ，農業の近代に鍵があると考えていたので，品種の改良さらには奴隷制に変えて自由契約に基礎を置く，賃金労働制に代えることを主張したりもした[48]。

そのような視線から彼が著した著作には，仏語で著した『キューバ島に関する地勢・政治・自然史』（1842），スペイン語による著作では，『キューバ島に関する地勢・政治・自然史』（1861），『キューバ島に関する地勢・政治経済・知性・文化史』（1861），『キューバ島に関する経済的・政治的・統計論』（1831年，ハバナ刊）等がある[49]。

2　フランシスコ・アランゴ・イ・パレーニョ

1765年に生まれ。1680年スペインはナバラ地方サングエサからキューバに移住してきた家系である。ハバナ大学で学び法学士になる。1787年スペインに渡り，弁護士になる。のちハバナ市議会の代理人に指名された人物である。

思想的に見れば，18世紀末から19世紀に至るキューバ寡頭層の中で，開明派とされるが，プラグマティックな立場で行動している。従って，あるときには奴隷貿易を支持するが，状況が変われば支持を撤回する。それが如実なのは，1789年の論考『奴隷貿易に関する最初の提言』に見て取れる。その中から引用してみよう。

> 三世紀にわたる経験と，それにまして理性が確証してくれたことは，アメリカ植民地の貴金属ではなく，復路の果実こそがあらゆる国々の首都を祝福する産物なのであることだ。この金言を実行することは，開明的な政府があらゆる注意や配慮を傾注する使命なのである。耕作される姿を見たい土地の消滅が進行すると思いきやそうではなかった。

---

(48) *Ibid.*, p. 47.

(49) *Ibid.*

というのも，宗主国の本土にはこの目的にふさわしい必要な資源，つまり必要な労働力見いだせなかったけれども，アフリカの西岸がこの不都合を除去し，わき出すような人の群れが関心のある目的に最もふさわしい人員を与えてくれるのである[50]。

デンマーク人やオランダ人，ポルトガル人，フランス人，そしてとりわけイギリス人は，アフリカ沿岸に赴いて直接にこの悲惨な貿易を手がけたのだった。我らがスペインはひたすらその資源を取り入れることを自制してきた。スペインがそれ自身で，根本的な不足を充足するだけの人員を持っていたからだろうか。否，不幸なことに，スペインの労働力はその他の国々のそれに対して比較的少ないし，逆にスペインの必要とするものは他の国々すべてを併せたものよりも遙かに大きいのだ。それでは，我々はどうやってその苦境から不幸を取り除けるだろうか。黒人を競争相手の国々から奪取すること以外に他の手段はない[51]。

この規定を設定した上で，次のことも定めておかねばなるまい。国家が外国から必要とすることは，その国家にとってより安価な手段に限られると言う，我々に告げられる公理を実行に移さなければならない，ということだ[52]。

外国の手にある奴隷を獲得することのできる様々な方法を見てみよう。三つの方向がある。第一の方法は，外国が我々の海外領に奴隷を配分

---

(50) Francisco Arango y Parreño, "*Primer papel sobre el comercio de negros*," in Arango y Parreño, *Obras del ext. Señor D. Francisco de Arango y Parreño*, Vol 1 (Habana, 1888), p. 7. <http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000168656> (10 Feb. 2018).

(51) *Ibid.*, pp. 7–8.

(52) *Ibid.*, p. 8.

できるような絶対的自由化を進めること。第二の方法は，スペイン国王の臣下に限定して，その何れもが自ら望むところで奴隷を買い付けることができるようにすること。第三の方法は，独占的な契約をいくらかあるいは多数の商家と締結することである[53]。

そしてこの中で良い方策を示す。

煩瑣な論議をするまでもなく，三つの方策のうちで，第一の手段単独か，或いはこれを第二の手段と組み合わせたやり方が，農業の振興にとっては最も有益である。諸国に附与された絶対的な自由貿易行えば，アメリカ領植民地にもたらされるはずの利点が一目で明らかになる。必要な競合は，支払いの価格においても，奴隷買い付け者から除かれる疲労の面でも，必然的にこの上ない快適をもたらすはずである（後略）[54]。

そして結びのところで繰り返される。スペインでは「自由貿易令」が出されているが，これが奴隷貿易の面でも拡張・適用されることを強調している。

（前略）我々がすぐにでもそのような幸福な時代に到達する，最も時宜に適った手段は，奴隷貿易の完全自由化である。マドリードにて，1789年２月６日[55]。

3　ホセ・アントニオ・サコ

1797年から1879年まで生きた政治家にして歴史家である。奴隷制の批判

---

(53) *Ibid.*, p. 8.
(54) *Loc.cit.*
(55) *Ibid.*, p. 12.

者であり，初期にはアメリカ合衆国による併合に好意的だったが，のちには撤回する。師匠のフェリックス・バレラを継いで王立サン・カルロス学院の哲学教授となる。キューバ文学アカデミーを創設しようとするが，当局に反対され，ニューヨークに亡命する。1848年発刊の『アメリカ合衆国によるキューバ併合に関する見解』を引いてみよう。

> アフリカ系住民のうち，キューバではおよそ50万人が奴隷，20万人が解放されている。白人の中にはキューバ生まれもいるし，イベリア半島からの渡来者もいる。確かに数は前者の方が多いが，後者の方が彼らを結びつける感情をともにしている点ばかりか，権力，陸軍や海軍を専有しており，さらにはキューバ島の要塞を掌握している点でもより強力である。現今の状況下，併合に好意的なキューバ人の叫びにスペイン本国人が同意している等と想像するのは全くの幻想であろう。おそらく，数こそ少ないが，財産を獲得できるのではないかという金の力に幻惑されて　スペイン的な趣向をやめ新しい国旗に庇護を求める金満家たちがいるのだろう。しかし，圧倒的な多数はカスティーリャの旗の下に居続けるであろう。それゆえ，キューバ人の反発があるのは，アメリカ領にいるスペイン人は，本国にいるよりもスペイン人たらんとするからである（後略）[56]。

これを読むと，合衆国によるキューバ併合は，金満家おそらくは奴隷を多数所有する農園主が希望するスキームであって，多くのキューバ人は望まないはずの考え方である。しかし，スペイン人が本国人以上にスペイン人風を吹かすものだからキューバ人に嫌悪されるのだということがわかる。

---

(56) José Antonio Saco, *Ideas sobre la incorporación de Cuba en los Estados Unidos* (Paris: Panckoucka, 1848), p. 3. <http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000110587> (10 Feb. 2018).

（前略）併合という単語がキューバで繰り返し用いられ始めている。尋常ではない合衆国の膨張ぶりと同国が享受している温和な自由とが，奴隷化された民衆の目には強烈な魅力に写るのである。もし，キューバ人たちが北アメリカという星座の中に出現する星を凝視することにスペインが耐えられないのなら，その旨了解した証拠を示されんことを，そしてキューバの上に自由の土壌を輝かしめんことを[57]。

ここにおいては，併合策を根本から断つためには，スペインが専制的でなく，寛容な自由を持つ国であれば，キューバがスペインから離れることはないと語っているのだろう。あくまでも専制的であろうとすれば，おそらくはサコが且て然うであったように，自由主義者が奴隷州ではない合衆国が持つ自由に惹かれる余り，キューバ人が併合策を希望するかもしれないという危惧を述べていると言えよう。

4　リチャード・マッデン

英西間の条約を巡る攻防で，スペインが手を焼いたのがデイヴィッド・ターンブルだった。これに劣らず，奴隷制ならびに奴隷貿易似強く反対したもう一人の人物が，リチャード・ロバート・マッデン（1798-1886）だった。本稿の記述に関わる範囲で，この人物の経歴を次に示してみよう。

ダブリンの絹織物業者エドワード・マッデンの末子である。パリやナポリ，ロンドンの聖ジョージ病院で医学を学ぶ。1824から27年にかけては，レヴァント地方を旅行し，具体的にはスミルナ，コンスタンティノープル，クレタ島，エジプト，シリアである。この成果が1829年に発刊された旅行記である。28年にイギリスに帰国すると，ジャマイカのジョン・エルムズライの娘ハリエットと結婚する[58]。こうしてジャマイカと縁ができること

---

(57) *Ibid.*, p. 16.

(58) *Oxford dictionary of national biography*, vol. 36 (Oxford Univ.Pr., 2004), p. 72.

になる。

1833年まで外科を開業したのち，ジャマイカに渡る。その地で，34年に奴隷制に代わって新たに年季奉公制が導入されたが，白人の主人と黒人の奉公人との争いを解決する役割を担った。奉公人に肩入れする余り，農園主と対立，結局34年11月に職を辞した。その時の経験が今度は，1835年に発刊した『奴隷制から年期奉公制への移行時期の間，西インド諸島に滞在した十二ヶ月間の記録』になった[59]。ここまでがジャマイカで奴隷解放後の政策に関与した活躍である。

1836年，解放奴隷監督官とハバナ混合裁判所の判事に指名された。キューバに４年間滞在した間，数多く奴隷制に関する著作をものしたが，その中には1840年刊行の『キューバにおける奴隷制』がある。1840年にはキューバを去って，モーゼス・モンテフィオーレ卿とともにエジプトに渡り，あの儀式殺人で訴えられたダマスカスのユダヤ人を弁護した。更に，1843年11月から1846年８月までリスボンにいてモーニング・クロニクル紙の特派員として駐在した。ハバナ駐在は濃密な４年間だったが，そのあとはエジプトの太守モハメット・アリーが関わるオスマン・トルコ帝国で活躍したことになる[60]。

以上のことだけからしても，リスボンの駐在も含め，反奴隷制との関わりが強い人物であったことが明確にわかる。

1840年に刊行した著作『キューバの奴隷制』から引用してみよう。

> 1839年７月23日，フランス領植民地の奴隷に関する提言の検討を委任された委員会の名で，アレクシス・トックヴィル氏が委員会に提出したレポートの中で，私はフランスだけでなく，この国でも広く流布するとても重要な誤りを見つけた。スペイン領植民地で黒人奴隷の扱いに関する問題における誤謬である（後略）[61]。

---

(59) *Loc.cit.*

(60) *Loc.cit.*

そして，トックヴィルの記した，スペイン領の奴隷制の特徴六つのうち，五つを誤りとして，せいぜい一つが正しいにすぎないと記している。その誤りを記してみよう。

> 1．スペイン領においては，黒人奴隷制は常に「特有の穏健さ」という性格を持っていたこと。2．そのような性格を示すに足りる十分な証拠は，いくつかの植民地統治に対する，スペイン王が出した法令からかなり導き出せるということ。3．スペイン人はインディオに対してはあまりにも残酷な主人だったが，「並外れた慈しみで常に奴隷たちを扱ってきた」こと。4．主人の権威は家族における父親のそれに似ていること。5．善良で人間的な待遇の故に，奴隷たちは買い戻しを利用してまで自らの自由を主張する特権を利用することは滅多になかったこと[62]。

そして唯一正しいとする言明については次のように記している。

> 一節全体の中で唯一正しいのは，以下の言葉に含まれている。「これらの植民地では，白人と黒人の区別が他の植民地よりも少ない」。というのも，観察の結果，スペイン人の間では，外見の故に，アフリカから拉致されてきた人々に対する偏見が他の欧州諸国よりは少ないと思えるからである。そのことはあまりにも疑問の余地がなく，いにしえの「征服者たち」の子孫の血管中にはあまりにもムーア人の血が流れているので，感覚がそれ以外ではあり得ないのだ[63]。

---

(61) R.R. Madden, *Address of slavery in Cuba* (Johnston & Barrett, 1840?), p. 3. <http://reo-nii-ac.jp.kras.lib.keio.ac.jp/hss/200000000210976> (5 Feb. 2018).

(62) *Ibid*., pp. 5-6.

(63) *Ibid*., p. 6.

5　フェルナンド・オルティス

近代地理学の金字塔は，フランスのヴィダル学派の著作に見ることができる。中でも，ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ，ルシアン・ガロワらが編集者になった『世界地誌』がその好例である。キューバ人フェルナンド・オルティスは地理学者であったから，この世界地誌の一部をスペイン語訳する作業に携わった。原本であるフランス語版『世界地誌』第十四巻は，マキシミリアン・ソールが編集を行い，タイトルは『世界地誌メキシコ・中米篇』である。その中でアンティル諸島に充てられている部分は166ページに過ぎない。

そこでスペインはバルセロナで発刊された翻訳版では，前書きにあるよう「フランス語版の本文を最新の統計データや科学的データに差し替えただけでなく，記述を増やすことが適当だと思えた」[64]ので，この第十九巻のタイトルは“Antillas”になっている。つまり，「アンティル諸島」というタイトルなのである。目次を見ると次のようになっている。

> 第一部：概観。第一章：地勢的構造；第二章：海洋と気候；第三章：フローラとファウナ；第四部：人口構成：第五章：文明。
> 第二部：各国編。第六章：キューバ共和国（大地・海洋・気候）；第七章：同（フローラ，ファウナ）；第八章：同（住民と文明）：第九章：同（政府と都市）；第十章：同（砂糖産業）；第十一章：同（タバコ産業）；第十二章：同（他の産業と貿易）；第十三章：ヒスパニオラ島（ハイチとサンとドミンゴ）；第十四章：ドミニカ共和国；第十五章：ハイチ共和国；第十六章：プエルト・リコ（大地；気候；住民）；第十七章同（文明・政府・都市）；第十八章：同（経済）；第十九章：ジャマイカと英領小アンディル諸島；第二十章：フランス領，アメリカ領，オランダ領，ベネズエラ領のアンティル諸島[65]。

---

(64) Max Sorre and Fernando Ortiz, *Antillas con apéndice estadística*, 2nd ed. (Barcelona: Montaner y Simón, 1948), p. 6.

スペイン語版では本来のフランス語版に比べ，砂糖・タバコ産業の記述が詳しくなっている。

結びに代えて

キューバの奴隷貿易禁止，奴隷制廃止はキューバの地政学的位置に奔弄されたきたかのようだ。一方で英国との外交関係の中で進行していき，他方，合衆国内の自由州・奴隷州の力関係により決定されたといってよい。アメリカによるキューバ併合論もその中で生み出された期待であったといって良かろう。本稿でいえば，前者は二回の西英条約，後者はサコの『併合論』で言及した。

そうした情勢下，キューバを記述する定型はまず，フンボルトが先鞭をつけていった。次に，改竄といわれかねない翻訳が長年君臨し，二十世紀前半にオルティスがその誤りを指摘し，英語版に至っては二十一世紀になって正確な翻訳が登場したのだった。

奴隷貿易廃止，奴隷制廃止などの諸政策が成就しても黒人問題は目論見通りに解決しなかった。すると，制度がいくら援助を与えても，黒人は変わらない，だから劣勢的な存在なのだ，という主張になればゴビノー伯爵の思想ともつながることになる。以後は，このゴビノーとキューバないしブラジルとの関わり，フェルナンド・オルティスの骨相学といったテーマを考究することとなろう。

---

(65) *Ibid*., pp. 7-8.